

物類品鑑六卷、淨貞五百介圖三卷、神農本草經圖四卷、神農本草和名考二卷、本草比肩十二卷、食物本草一卷、火浣布考一卷、火浣布略說一卷、四季名物正名四卷、日本物産譜二十四卷、その他神靈矢口渡根無草、院劇話本の如き多數の書を述ぶ。

源 内 燒

本朝陶記考證に左の記事あり、鳩溪は志度浦の産なり、寶曆年間長崎に至り交趾燒の傳を得て歸り、後茶器及諸物意に任せて製す遠近之を珍とす。平賀源吾は源内の甥なり、燒物の傳を源内に受け種々の品を製作す、没後其業を繼ぐ事なし。

(附記) 本書に源吾は源内の甥とあれど、源吾は志度町某肴屋の子にして常に源内に從ひ陶法を會得し、現今世に残存せる源内燒と稱する器は多く源吾の製せしものなりと云。

松平家登仕録に左の記事あり。

定府平賀元内國倫、(江)初源内寶曆十年辰五月廿七日更元内、初給三口(以學術也)寶曆十年辰五月十二日給四口銀十枚爲藥坊主格、同十一年巳九月廿一日辭職俸。

左の文は友人渡邊桃源の追悼文なり、錄して其友情の厚きを知らしむ。

鳩溪雅伯は讀の豪傑にしてしかも風月の情あり、年頃吾と交はり厚く詩作の吟席劍

馬の藝術かりそめの旅にも此人なくはと樂に思ふて琴を斷の友なり、生質志高ふして東都に赴き聖堂に寓居し螢雪に眼をさらし、中にも本草物産に長し聲名四方に聞ゆ筆をはなさす机を去らす綺語戲言車馬に汗すへし、程なく侯より俸祿を賜はり寵淺からず故郷へ供奉して歸る事兩三度に及へり、或時「故郷へもいま木綿の袴哉」といひ送りけるを思へは五斗米の爲めに腰折無事もむつかしと思ひけん、官を辭して神田に卜居し高貴にむつひ卑賤に交はり、關の八州又は筑紫にかけ歩行て國家の益なる事而已に心を盡しその氣象の大なるは大鵬の如し、もろこし紅毛の人にも名を知られ才を賞せらる、去年の冬不慮の災難ありて程なく極月十八日病を以て世を去給ふと訃音を聞、したしき限りはなを更しらぬ人までも手叩いて惜まぬはなしなくてぞ人は忍はるゝ習、まして兩の手の如くしける友なれば此事を聞と魂消、腸ちきれて百年の悲しみを生す、年頃里の東に杖を曳きて松崎象瀉へ伴はんと約せしに、此時東行の思ひを失ふ半白の齡なを志しの透さる事をさそ口惜くもあるへきと今はの時の間さへ思ひやられて胸ふさかりぬ「村雨や夜は衾に晝は袖」とは其時の愁吟なり、光陰流れてはや小祥忌になりぬ、驚き定めて又涙を閑窓に拭ふて昔を思ふのみ。

友呼はよく我を知千鳥哉

三千舍桃源拜

左記は源内が四十八歳の時院本の處女作で世の稱讚を博したもので、新田義興の末路其の弟義峰(義宗)の流離の
状を叙し、終に義興の亡靈が神に祀られる次第を綴つてある、其の四ツ目の奥頓兵衛住家の段は今も淨瑠璃に
語られ、劇に演ぜられて人の耳目に觸れる事が多い、此淨瑠璃は新田神社の神官が同社が追々朽壞に傾くので
同社の興復を計るべく源内に囑して作らしめ、此を其當時の演劇に演ぜしめ爲に同社の復興が成りしものなり
と云ふ。

矢口渡

六郷は近き世よりの渡にて其の古へは都より、東へ通ふ旅人の、廻るも遙々と弦。
矢口の渡と聞えたる其の水は調布や、さらす垣根の朝露を、貫き留めぬ玉川の、
舟を浮ぶる流より、知らぬ心の底深き、渡守の頓兵衛が、内とは思ひかけ作り、物
好したる亭座敷渡世には似ぬ家作りは、瑪瑙の階、瑠璃のとばり、龍宮城の乙姫か
それかあらぬが娘のお舟、鶯が孔雀のぼつとり者、田舎に惜しき姿なり。

秀延

後深草天皇の時の刀工にして志度浦に住す、或は銘に心蓮と云ひ又秀行とあり、是れ
亦子弟相承くるなり、其の鍛ふる所の劍地膚鋒及の状頗る相州傳に似たりと云ふ。
前記事は大川郡史の記す處なるか明和五年出版の類字銘盡によれば左記の如し、蓋し

秀行は子か弟子ならん。

秀延、志戸に住、藤原と打、建長年間の人(六八六)

秀行、同 建治年間の人(六六〇)

久本智實

香川郡圓座村の人、米山と號す、其室を群居和一堂と號す、詩文書を能くし、又篆刻
は良山に學んで能くす、文政頃の人。

久本米山

號米山、文化頃東讚人、〇畫を能す。

久本竹齋

號竹齋、天保頃青海人、〇書畫を能す。

平尾意美

名意美、通稱平三郎、藻海又對山と號す、高松藩士、〇歌を能す、好んで諸書を抄寫

す、明治三十九年頃歿す。○寄書懷舊、命毛はきれても残る筆の迹墨の色にも光みえけり

平澤 籟山

號籟山、鷓足郡七器人、○四條派の畫を能す、明治三十四年二月歿す。

平井 兵左衛門

小豆郡池田村の人、池田郷の大里正にして名は民政、延寶五年の生れなり、人と爲り沈毅剛膽能く其の職務に精勵し大に民望あり、且書を能くし騎馬に長じ插花に巧みにして謠曲に堪能なり。寶永四年高松藩漁民富士の瀬の漁場を侵すものありしを以て之を幕府に訴へ審理七ヶ月遂に勝訴となれり。翌五年我本島の高松藩主の預り地となるや、島民安んぜず同七年按察使の本島巡回に際し、池田村彦兵衛與次左衛門等島民の疾苦困難の情を具し哀願書を提出せり。因て幕府に召され審問の末民政は島民を煽動せしものとの罪名の下に斬刑に處せられたり、正徳二年三月十一日なり、時に年三十六、島民痛恨せざるなし、後文化八年一百年に當り其の徳を慕ひ祠を八幡宮馬場に建て平稱靈神と號す。明治四十五年二百年を期し、郡内官民大祭を擧げて神祠を再建せり。

(小豆郡史)

平井 兵左衛門

小豆郡池田村濱條の人、元大庄屋兵左衛門の裔にして始め定八と稱す、池田村の里正たり、資性謹直にして事績頗る擧る、夙に風流を好み殊に俳句に秀す、揚雲亭鐵蕉と號し吟詠頗る多し、又鳥鷺の戦を善くす、天保四年四月十五日生れ、明治十一年五月二十八日歿す、年四十六。

平井 純三

小豆郡四海村の人、本村長濱平仲達の男、舊名順二、二山と號す、幼にして父に離れ岡山石井宗軒に従ひ蘭醫の初歩を學び、後ち江戸に出で蘭醫大槻俊齋(林洞海宇田川と共に將軍家侍醫の三大家)の門に苦學すること六年、郷に歸りて醫業を開く、此れ本郡蘭法醫の創始者なり、既にして高松柏原謙益に知られて其顧問となり、又同地明七義塾員に擧げられ次で古馬場町に開業し、後ち豊島又は吉野に轉寓し遂に郷里に歸りて明治廿一年二月四日病没す、年五十六。

平田與一左衛門

三豊郡大野原の開基者なり、抑も平田家の祖は平貞盛より出づ、數世の後甚治なる者あり、江州大津に住す是即ち平田與吉正成の父にして大野原開基與一左衛門の祖父なり、正成は出でて平田小左衛門の養子となり江州湊町に住す、其長子に平田與一左衛門なる者あり、幼名を左平治又は庄右衛門と稱し入道して休甫と號す、明暦二年十月姉小路玄徳の宅に歿す、家世々富豪にして財多し、長男平田源助正澄は幼名を五郎吉と云ひ後與左衛門と改む、寛文三年大野原に移り貞享四年十一月五十九歳を以て歿す正澄の子正清、正清の子正富、正富の子正之、正之の子正美、正美の子正容、正容の子正宥、正宥の子正静は現代平田熊善氏の祖父なりと云ふ。

(附記) 大野原の開墾は寛永二十年平田與一左衛門が大阪備中屋藤左衛門、三島屋又左衛門、松屋半兵衛三名の共同にて時の藩主山崎甲斐守の許可を得て着手し、慶安二年に至り百八十町歩を開墾せしも水利の便宜しからず、開墾地又荒蕪に歸し收支償はざるを以て他の三名は組合を脱し其權利を平田氏に譲り、翌年より與一左衛門の子與左衛門一人の有に歸せしより、平田氏は寛文三年京都の邸宅を賣拂ひ家を舉げて之に移住し、遂にその功を遂げて世々大地主たるに至れりと云ふ。(三豊郡史)

平間見之助

小豆郡池田村の人、幼にして備前國宿毛村田淵某に就きて建築並に彫刻術を學ぶ、居ること僅かに一年餘にして天稟の技能現はれ早くも出藍の譽れ高し、弱冠にして棟梁となり備前國西大寺の建築に従事し、其の枝の非凡なるに世人を驚嘆せしむ、其の後技術年と共に進み始終棟梁として廣大なる社寺宮殿の造營に従事す。三豊郡本山寺なる五重の塔、大川郡白鳥神社、木田郡八栗寺山門、池田村保安寺、豊島十輪寺護摩堂等縣下に於ける其の建築物中の有名なるものなり。大正二年九月没す。(小豆郡史)

廣瀨 達

諱は可行、竹庵と號す、讃藩の儒員にして詩文に達し兼て蘭書に通ず、嘉永七年亞米利加總記の著あり、其序文は藤森弘庵の書する所、跋は小野湖山かけり、居所號雲竹小居と云ふ、嘉永四年頃の人。

廣瀨 石村

諱廣、字伴之、通稱蕃二、寒川郡石田村の人なり、父を伴孝と云ふ、幼にして家政を

監理し夙に慧學を好み、繪事は郷人藤田版屋に學び、特に山水に長じ兼ねて詩を能くし、文雅を以て稱せらる、明治五年八月十七日歿す、享年七十二。

廣瀨 駒造

駒造は三石と號す、文化六年仲多度郡家村に生る、壯年の頃より俳諧を好み、蕉門の風を慕ふて歌才を磨き、杏里一椀(宗兵衛)同燕齋(藤馬吉)九龜の芳笠、金藏寺の綾西館等と其道を辿りて相往來し、又古今の名人を友として其老後を樂めり、明治十六年十一月三日歿す、年七十四。

廣瀨 重兵衛

小豆郡安田村の人、其の先は播州赤松則祐の裔廣瀨重兵衛則通にして父を廣瀨將監親則と稱す。本島坂手村に來住し漁農を事したりしが後本村橋の開拓すべきを思ひ、文明年間始めて之を開墾せり、實に今を距ること約四百五十年前にして橋村の起原をなす、後ち村民其の徳を慕ひ小祠を建て、其の靈を祀り廣瀨神社と云ふ。(小豆郡史)

廣瀨 東原

號東原、石田村の人、竹石に學んで畫を能す、詩文は茶山に學べり、天保頃の人。

廣田 孤山

號孤山、文化頃西讃九龜人、○書を能す、文化九年竹石展觀錄に藍采和圖を出せり。

廣田 松庵

號松庵、文化頃人、○書を能す。

廣田 貢

字子功、號松巷、九龜の商賈、詩書を能くす、漆谷翁の終者と聞けり、書風ソックリ漆谷に似たり、天保頃の人。

彦 四郎

通稱彦四郎、木田郡川添村元山の人、農徳左衛門の子、○享保三年生る、十八歳の時諸國を遍歴し、後陶法を尾張に受く、歸つて香川郡御廐に製す、因て御廐焼と稱す、昭和三年五月廿七日氏の墓所に左の碑を建てたり。

彦四郎氏の碑

御廐焼の元祖彦四郎氏は享保三年山田郡元山村に生る、其父は徳左衛門と稱す、其家世々農を業とせしが氏は幼より大志あり、一大事業を起さんが爲諸國を遍歴し、會々尾張の國に至り製陶業の盛なるを觀て大いに感動し留り學ぶ事數年、郷に歸りて窯を築き之を試みしか土質適せず全く失敗に歸せり、こゝに於て更に國內各地土質を研究し、御廐村津内山麓に於て最好の陶土を發見して大に悦び、終に此所に居を定の専ら力を製陶に致し遂に御廐焼の法を發明せり、此の陶器價格の廉にして實用的なるより販路日に開け、同業者年々増加して現今百戸を算するに至れり、寛政九己年二月朔日歿す、行年八十、村民其遺徳を追慕し相議して碑を建て其事業を後世に傳ふ。

昭和三年三月吉日

尾崎正之撰 御廐紫峯書

皮肉骨金右衛門

通稱金右衛門、高松藩の右筆、○大水主神社の仕著の悦は其書といふ。

肥田政信

名政信、通稱忠藏、高松藩重臣、肥田大隅の養子、明治元年二等執政、同四年陸軍少佐となる、廢藩後松平家令となり、明治廿年七月十八日歿す、年五十七、歌を能す。

○元日 天の戸を明れば今朝は新玉の年豊かなる春の初風

百川

三豊郡大麻村の俳人、臨松亭と號す、芝峰の門人、文化三年全國より俳句を募集し、此れを其師芝峰に選擇せしめ一千二百首を得て金毘羅宮に奉額とし、同時に山莊集と題し大阪八千房木僊と芝峰散人との序文を得て出版せり。

遺詠 冬ながらさゞげん言の葉も花も

百靈

名百靈、寛政文化頃の僧、○詩を能す、僧秀峰の絲濱亭詩集に、讃南獵川百靈上人逸才云々とあり、○著書、三處庵詩集あり。

ヒ 號 索引

- | | | |
|------------------|---------|----------|
| 百助 (多田) | 筆山 (徳永) | 廣葉 (奈良) |
| 百龍、彦四郎、皮肉骨彪 (深井) | 水壺 (細川) | 水室 (岡井) |
| 筆岳 (村田) | 水壺 (細川) | 美成 (宇都宮) |
| 百穀 (牧) | 雜吉 (川島) | 彪 (岡井) |

〇モ之部

物部

亂ミヤム

寒川郡の人なり、續日本記和銅六年五月の條に、讃岐守正五位下大伴宿禰道足が寒川郡の人、物部等二十六人曾て良民たりしが、庶寅校籍の時誤て飼丁となり居たりしを良民に復したる旨上言せり云々。

物集 大藏太夫

奈良元政の重臣なりしが天正十年以來數度土軍の攻むる所となり、領土を保守するを得ず遂に主人と共に阿波に奔り三好存保の軍に合し、中富川に於て土軍と交戦 晴なる戦死を遂げたり。

森

權平

(來寓人)

は仙石秀久の家臣九郎左衛門の嫡男にして秀久の從弟なり、年少なれども勇氣あり。

天正十二年秀吉に従ひ東讃に来る、時に同年七月十九日元親大窪越をして寒川郡に入り引田中山にて仙石秀久の軍と開戦す、此時仙石方追立られて引田中山道に入る權平は十八才の若武者なれ共大剛にして奇才あれば、我兵を下知し返し合て奮撃し敵を破て勝を制し引んとする處に、土佐方稻吉新藏人と名乗て互に馬上にて渡り合ひ、兩敵共に深手を負ひ、權平は續く兵なく新藏人は身方續て權平は爰にて終に戦死せり。權平の墓は大川郡伊座の路傍にあり、討死せし處に石塔を立て後庵を結び今に及べり法名を月山崇薰居士と云ひ、四時賽客絶へすと云ふ。

森 長見

名は長見、通稱は助左衛門(廣濱堂)と云ひ多度津藩士なり、森四郎左衛門の後裔にして多度津侯の馬廻役を勤め祿五十石を受く、公務の餘暇國史を博覽し其蘊奥を極む、寛政六年十一月廿六日歿す、年五十三、墓碑は仲多度郡鳴道隆寺内にあり、著書國學忘貝あり、天明三年秋出版す。

森 赤嶽

名清頼、字仲倫、號赤嶽、小豆島人、○久家暢齋の玉蘭社に入り詩を學ぶ、文政二年

歿す、○春晚郊行、尋詩杖屨未知餘。行到山村日已斜。一樹桐花春寂莫。書湖聲裏兩三家。餘技に書をかく竹石の畫風にて氣韵あり、綠韵堂と號す。

元 姫

高松藩主穆公の第二女、始の名虎又喜知、寛政九巳四月二十二日生る、後元姫と改稱す宗對馬守義暢公の室、和歌を能くし筆札に工みなり、安永六年五月廿三日没す、母は細川越中守宜紀女八代姫女中(同家中、中島新治相房の女、名は於里能と云ふ)

守屋 義門

名尙義又義門、曆天文を以て高松藩に仕ふ、本姓物部、守屋義知の子、通稱氏右衛門晚年號心翁、○槍術を能し、甚讀書を好む、芝山曾て従ひ學ぶ、著書、周易本義旨註抄二十卷あり、芝山之に序す、寶曆十二年十二月歿す、年八十一。

森 東溟

名良厚又淳、號東溟又文龜、大内郡引田森直七の男、○谷文晁に學び書を以て高松藩に仕ふ、山水花鳥人物を能し最も著色に長ず、天保十四年八月没す、年七十二。

森 良敬

名鼎、號爲不知齋又石鴈、東溟の男、高松藩書師、○土佐光文に學び故實畫に巧なり、晩年石鴈の號を以て南畫をかけり、明治十三年十月没す、年七十、○鼎を加奈邊とも書けり。

森 直樹

初め繁太郎後賢良と稱す、高松の人、森鼎の男にして弘化四年十月廿九日の生れ、幼より業を父に受け、慶應三年より住吉内記廣賢に隨ひ高松藩の書師を勤め、明治八年地租改正の際各村の地圖を製して功勞ありし人なり、明治四十一年没す、年六十二、歌を能くす。寄夏月祝、若竹の葉末の月の影きよみ君が八千代のふしぞみへける

森 文右衛門

文化十三年正月廿七日小豆郡大鐸村黒岩に生れ、幼より俳句を好み、俳名を旭峰座六員笛庵、當日庵、牛守等と號せり、始め廣瀬橋中の門人となり、秀才の聞へあり、後妙見員笛庵に學び次で尾張の可大に従ひ、俳道大いに進み關西に冠たり、京都の芹舎

出雲の曲川、筑紫の悠々等に交はり實に天保安政明治初年に於ける斯道の大家なり、其の製作したる句數二十萬以上にして、十四歳頃より死没迄殆んど六十年間平均一日十句以上を作りたりと云ふ、練達なること以て知るべし、明治二十四年四月四日歿す年七十二。

森 皆山

小豆郡大鐸村の人、通稱森時二と云ひ吳雪、雲溪、皆山等の號あり、俳人座六の長男にして性温厚、文學を好み、殊に書畫を能くす、書は始め子昂を學び後董其昌の書風に涉り、畫は能登の李堂を師とす。性頗る熱心緻密にして技能く進み、當時郡中にて名聲高かりき、中年にして一時三小區戸長となる、明治三十五年四月一日歿す。

(小豆郡史)

森 鴻之助

諱は武成、小豆郡草壁村大字下村森楯之助の長男なり、人と爲り勇敢身幹偉大風に武を好み、劍道に達し、商業の傍ら近傍の子弟を教養す、諸國修行の劍客にして訪問するもの頗る多かりしも能く其の右に出づるもの殆んどなかりしと云ふ、明治六年卒す

年三十一。

(小豆郡史)

森 太郎右衛門

は小豆郡四海村瀧宮重郎右衛門の長男にして、天正年間備前岡山の城主宇喜多家に奉公中射術の功に依りて刀劍を賜る。其の後裔市松現に傳へて左の古文書と共に之を藏せり。森重郎右衛門子太郎右衛門一と也、備前岡山の御城主中納言様へ御奉行仕りその節大なる猿いでわざわい仕候故御家中町中狩り申候へば御城の角やぐらへ上り居申に付小ひやうにては成がたくとて彼の太郎右衛門に御仰付三人はりにて早速射落し高名仕御褒美に刀一腰拜領仕その時の弓や刀于今有之候太郎右衛門子彌右衛門まで五代不相變組頭役相勤居申候森重郎右衛門先祖書如斯候以上

寶永四年丁亥二月森彌右衛門尉備前侯より拜領せし刀劍、刀身二尺五寸四分、柄五寸六分、銘備前長船住勝光(猿を射し弓は其後小海庄屋へ譲與せしと云ふ)

(小豆郡史)

森 九八

小豆郡四海村瀧宮強十郎の三男、體軀偉大大阪に出で、理髮を業とす、南御堂の門前

に於て敵討あり、之を傍觀せしに其の主人の稍遜色あるに氣附き場に入りて之を助勢し以て首尾よく本望を達せしむ。演劇(御堂の前の敵討)中の髮結の九八は即ち之なりこは貞享年間の事なりしと云ふ。

(小豆郡史)

森 龜齡治

小豆郡四海村小江の人、幼名を重太郎と云ひ初代善四郎の長子なり資性沈毅容貌魁偉人其の博聞強記なるを呼んで綿屋(商家屋號)の地獄耳と云ふ。夙に父業に隨ひしが嘉永五年父歿後綿油素麵米穀の諸商を繼承して一意之が發展擴張に腐心する所あり、他方小江庄屋に擧げられ更に安政六年津山藩廳新に船方總取締役を置くに至り、先づ之を拜命して帶刀を許可せられ、明治三年藩知事の巡視に際し其の邸宅を以て旅館に充つ明治五年香川縣廳の設置あるや同五年第廿五區副戸長を命せられ又克く其の任を全ふしたり、慶應三年百姓一揆(強訴と云)の暴舉に會して以來思ふ所あり、念を商業に漸ち實實以て家産維持に努むるに至れり、心中恒に陽氣に滿ち寸暇を求めて茶湯插花諸禮謠曲園基等の諸藝に優遊せり、同二十九年二月十四日午前六時炬燵の一隅に座し(ヨイシヨコシヨ)節の手拍手を取りて謠ふらく(梅にやはれても櫻にやはれな同じ花でも散りやすい)と唄終れば命亦終る。時に年七十八。

(小豆郡史)

森 遷

は方城、葆和堂と號す、小豆郡四海村大字小江の人、嘉永四年正月十九日神懸山下の上村に生る、幼名駒吉父は大橋助市郎(後四作)と云ふ、萬延元年(十歳)にして西村阿彌陀寺多々羅文雅師の徒弟となり、明治元年(十八歳)片城極樂寺住職となりしが明治五年二十二歳還俗して名を喬木遷と改む、明治七年森龜齡治翁に養はれ其女隆子と結婚せり、初め小田瞭堂に後中桐儉吉に従ひ漢學を修め後自修して漢詩文を能くす。

職 業

明治三十五年より果樹園藝を營み、就中除虫菊の栽培に努め、著書數種あり。

官 公 職

明治五年村役人を振出しに小學校教員、戸長、縣會議員、郡書記、郡長(明治十二年より同二十九年迄十八ヶ年間)郡會議員、農會長、教育部會長、素麵同業組合長神懸山保勝會長、森林會議員等

褒 賞

大正二年二月藍綬章下賜

著 書

除虫菊栽培摘要、重要植物栽培便覽表、除虫菊の効能、小豆島御寄泊私記、龜壽集小豆郡沿革私記、小豆郡史。

前記の著書中小豆郡史は氏が半主の精神を傾注せし最大著述なり。

趣 味 嗜 好

詩文、插花、書畫、點茶、圍碁、即席にわか、酒煙草は用ひず甘味を好み。

斯くて氏は小豆郡の爲に官公私の別なく盡瘁しつゝ、ありしが大正十四年五月四日七十五歳を以て逝けり。

森 洽 藏

洽藏は明治十二年八月十一日小豆郡四海村に生る、父を遷といふ、明治三十七年東京帝國大學國文科を首席を以て卒業後大学院に入り傳説を研究す、獨逸協會講師、第五高等學校教授、第一高等學校教授に歴任し、傍ら明治大學法政大學に講師として教便をとる、官は高等官五等從六位八級俸に至り、大正元年十二月六日病歿す、年三十四著書、明治文學者の古人今人、書籍總目錄、小豆郡略史等あり。

森 口 小 八 郎

小豆郡四海村の人、幼名邦太郎後先代の名を襲ふ、赤水と號す、性活潑、少年の頃備前閑谷校に漢學を修め、歸郷詩を賦して自ら娛しむ、津山藩代官所に於て部民の訴訟ある毎に代官の内命を受け、其の仲裁の任に當るや如何なる難事も和解せざると云ふことなし。因つて藩はその勞を賞し苗字帶刀を許す、明治維新後同志と相謀り中桐星城を聘して寶幢坊に明親館を開き子弟を集めて漢學を授けしむ、後之れを郷校とし藩よりも補助費を受けたり、又長瀬時衡を聘し郷醫を集めて西洋醫術を學ばしむ、此の間郷校幹事を命せられ、後學制の發布あるや學校雜事係を命せらる、又同志と發起して八幡橋を改築し以て通行の便を圖り、大區の制により大區會を開くや選ばれて議長となり、明治十三年縣會議員に推さる等公共の事業に關し終身東西奔走せり、明治三十二年五月四日歿す、年七十七。

盛 澄 八 郎

小豆郡淵崎村の人、幼より才智衆に超へ、少年の頃第三區々務所に給仕として勤むるや種々の法令規則殆んど之を暗記し、其の吏員却て給仕に聞くもの多かりしと云ふ、壯年の頃酒造業を開始し漸次之を擴張す、嘗て本村戸長又は村長、郡會議員、縣會議員となる、頭腦明敏辯舌善巧にして克く其の職責を完ふせり、又司法省破産管財人を

命せられ、四國酒造聯合會評議員に擧げられ且つ品評會等より功勞賞杯を贈與せられしこと多かりしと、明治四十四年八月十二日歿す、
(小豆郡史)

茂 椎

丸龜の人、藤井氏、名は正容、菊壺と號す、蒼虬の門人、笠着集其他句集の著あり、天保年中の人。

網 浦

多田姓、松濤庵と號す、芹舎門、高松人、明治三十七年十一月歿す、年七十三。

モ 號 索 引

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 默老 (木村) | 茂松 (高島) | 茂矩 (黒木) |
| 默齋 (後藤) | 默庵 (牧野) | 主水 (入谷) |
| 求馬 (藤川) | 求馬 (林) | 默齋 (島) |
| 默翁 (岸田) | 默翁 (十河) | 母理美 (橘) |

〇セ之部

仙石秀久 (領主)

初め權兵衛と稱す、姓は源氏美濃土岐の支流なり、幼より秀吉に仕へ寵愛を得たり、天正十三年五月讃岐國を秀吉より賜ひしと雖も性勇猛にして慈愛心なく、入國の際年貢未納者十三人を聖通寺山下に於て釜煎りの刑に處し、又安原の山主甚太郎其下の頭人十二人及庶民百餘人を死刑に處する等横暴の所爲あり、人民親附せず、加之天正十四年十月豊臣氏秀久に命じ豊後の大友義純を援け、島津義久を征せしむるに膺り十河存保長曾我部元親等と與に六千餘人の兵を率ゐ豊後に赴かしむ、秀久島津勢と戦ひ大に敗績し十河存保、長曾我部信親及安富、羽床、香川、矢野、河村等阿讃の諸將並に總兵一千餘人盡く戦歿す、此れに因て秀久其罪を謝し紀州高野山に入る、秀吉大に怒り讃岐の所領を奪ふ、天正十八年秀吉北條氏を征する時窃に其軍に加はり戦功あり、因て信州小諸の城を賜ひ邑五萬石を食ましむ、又九州名護屋陣のお供をもなす、其子孫は今の但馬城主仙石讃岐守なり。

泉房五郎左衛門

香西氏の部將なり、天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時、天神廓を守りしが同日同所にて敵多兵を殺して戦死す。

宣政

は澄心、阿闍梨と號し、香川郡由佐村原文左衛門の子なり、長じて僧となり大川郡長尾神正院(宇佐神社の社務を掌りし處今は廢す)の住僧となり、膂力及膽力人に絶す、源英公之れを寵す、一日奉幣の爲め參殿せしが歸るに臨み、大蛇の社殿に蟠り居るを見て神託により曾つて、寒川元隣の奉納に係る劍を抜き之れを寸斷し、遂に其の劍を斬蛇劍と名づくこと云ふ、年代は元祿より正保頃の人ならん。

千宗守 (二世)

茶人なり、宗旦の季子千宗佐の弟にして茶道を能くす、一翁と號し武者小路の別宅に住す、似休齋又官休庵と稱す、讃州高松侯に仕ふ、延寶三年十二月十九日歿す、年八十三、碑面に一翁宗居士とあり。

千 宗 守 (二世)

茶人なり、一翁の男、業を父に受けて茶道を能くす、文叔と號す、讃州高松侯に仕ふ、寶永五年閏正月二十二日歿す、年五十一。

千 宗 守 (三世)

茶人なり、眞伯と號す、文叔の男、靜々齋と稱す、高松侯に仕ふ、延享二年三月廿八日歿す、年五十三。

千 宗 守 (四世)

茶人なり、三世宗守に茶道を學びて能くせり、直齋堅叟と號す、眞伯の養子にして高松侯に仕ふ、天明二年二月六日歿す、年五十八。

千 宗 守 (五世)

茶人なり、啜齋と號す、直齋の義子なり、義父に茶道を學びて能くせり、實は川越兵庫頭の男、天保九年四月十六日歿す。

千 宗 守 (六世)

茶人なり、五世宗守啜齋に學びて茶事を能くし、好々齋と號す、啜齋の養子、實は柏叟宗室の弟なりと、高松侯に仕ふ、天保六年正月二十二日没す。

千 野 良 岱

名元達、號良岱又卉碗、高松藩奥醫師、〇七世祖三木義敏備前より來る、父標浩千野氏を稱す、〇良岱兄元琳ありしも先没せしを以て父の跡を繼ぎ内外科の治術に妙を得治を請ふもの常に門に充てり又傍ら詩文を能くす、醫書の著書頗る多し、名家載覽、大東類方、醫按裁斷、和蘭制劑、禁方小牘等あり、〇文化十三年十月歿す、年六十七、子寧國あり父の業を嗣ぐ。

千 野 乾 弘

良岱の先代、算數學に達し、明和五年に筆算開平立方方法及籌指南を著はし、江戸と大阪にて出版したり。

善次郎

善次郎は延享四年香川郡檀紙村字落合に生る、善助の長男なり、早く母を喪ひ繼母のため凡ゆる辛酸を嘗めしも常に孝養を怠らざりき、彼繼母の意を体して家督を弟に譲り身は傍らの小屋に住して黽勉業に努め家産を増す、藩主その孝養を憐み屢々金穀を下して表彰す、文政九年四月二十日年八十を以て病歿す、後村民其信義に感して碑を建て、永くその至孝を傳ふ、碑は御厩村字落合にあり、碑文は片山冲堂の撰なり。

妹尾天愚

名歌良、號天愚、香川郡淺野人、○俳及畫を好み、世事を抛つ、嘉永五年秋歿す、年五十八、墓銘は阿部絹州撰す、滑稽戲謔。文藻繪圖。和光諧世。樂與人俱。云云、○某書、天狗とあり、誤、○富士一つ處處に時雨けり、花となり實となりすでにこはれ栗

妹尾雲處

名全美、字士善、通稱初利平後賢、號雲處、香川郡淺野人、○畫は檜溪に、詩は篁山

に學ぶ、風流多藝なり、明治三十九年九月歿す、年五十四。

瀨山登

名は重嘉、通稱四郎兵衛又登、號棠川、丸龜藩士、天明四年正月廿八日生る、文化十年三月十八日家督相續、初め御小姓、文政四年大目付となり、天保元年勘定奉行となり、又天保十年物頭となり江戸邸留守居役たり、漢學は初め加藤梅崖に學び和漢學に達し尤も典故の學に通し、藏書數千卷あり、江戸在役中金比羅燈籠講を造り新堀築港に力を盡し又丸龜團扇創製者とも云ふ、氏又寫生畫を能くす、藏書中往々自筆の者あり○雅人錄に瀨川とあるは誤り。

瀨川政忠

名政忠、通稱武平又善九郎、本松原小財次の子、瀨川氏の養子、高松藩士、○歌を能す。○木村重成、五月雨のふりし昔の功こそ世々に流れて猶残りけれ

清野長太郎

氏は高松市の住人、彦三郎の子にして幼より穎悟、初め東原水平後黒木の塾に入り勉

學數年、稍や長して東都に遊學し初め共立學校、第一高等學校後帝大に入り法科を修め、業成りて内務省屬官を振出しに富山、神奈川縣の參事官、内務事務官から兵庫縣書記官を歴仕し、秋田縣知事に轉し、滿鐵理事となり後兵庫縣知事、神奈川知事を歴て大正十三年復興局長官となり、帝都の復興事業に身命を賭して恪勤せしが不圖疾に罹り、大正十五年九月十五日前途有爲の才を抱き五十八歳を以て逝けり、氏は子福者にして男六人女六人あり、長男暢一郎氏は現に姫路高等學校の教諭なり、○氏又多能にして漢齋と號し、繪畫を能くし就中達磨とお多福は其得意とする所なりしと云ふ。

法印 是妙

小豆郡淵崎村の人、本村森口氏の出、大僧都龍譽の弟子なり、學深く徳厚く且つ世故に通ず、始め金剛寺に住し寶曆十一年寶生院に轉す、明和元年甲申大鐘を鑄る、是れより先き先住僧龍門末寺十八ヶ寺を大覺寺直末と爲せしより門末之に服せず、茲を以て法門式微に赴くを懼れ三寶に祈願して寢食を忘るゝに至る、明和八年辛卯遂に裁斷を本山に請ふ、本山懇諭するも十八ヶ寺之に應せず、因て本山種々懇達せしと雖も其の内十三ヶ寺は頑として肯かす、遂に安永六年丁酉江戸に出て寺社奉行に訴ふるに至る奉行之を高野學侶在番に移す、在番之を檢覈せんと欲するも其の命を拒しかば已むを

得ず事件を奉行に奉還す、茲に於て寺社奉行は十三ヶ寺を以て本山及高野學侶在番の命を拒むものとし咎に依て逼塞を命し事遂に落着す。末寺の葛藤解決せざるもの實に廿七年其の遂に勝果を得たるもの一は幽祐に依ると雖も抑亦法印の力與て大なるものなくんばあらず、稱して當山第二の中興とす、天明六年二月廿九日寂す、年五十有三

(小豆郡史)

星 華

字星華、號五柳、西讃某寺住、詩牛の友人にして詩人なり、文化頃の人。

石 窓

名敬尙、號石窓、香川郡宮脇克軍寺十一世僧、本山田郡古高松川井茂一郎四男、詩書畫を能し、畫は山水竹石に長ず、嘉永六年十月寂す年七十八。

石 窓

名玄叡、號初星岳後石窓、小豆島池田保壽寺住僧、本中桐貞齋の弟、○畫山水を能す野呂介石の門人、弘化三年九月寂す。

雪 峯

豊田郡辻町の俳人、俗稱を木屋亮太郎と云ふ 起るまであめどもしらす鳴雲雀

栖 霞

大内郡馬宿村の俳人、俗稱濱垣親平嘉永頃の人。

青 節

上野 氏 7. 300 7. 20

綾歌郡山田村の人、俳句を能くす、明治三十七年十二月歿す、年八十五。
神の世にひとしきゆきのあしたかな

セ 號 索引

正宅 (増田)	正遠 (前川)	石門 (三谷)	青洲 (宮武)
石溪 (村尾)	赤松 (安西)	石泉 (青山)	星堂 (泉川)
西郭 (加藤)	雪峯 (香川)	前溪 (河地)	石驪 (木内)
星城 (中桐)	星岳 (中桐)	赤誠 (岡井)	拙齋 (岡部)
笑叟 (奈良)	石帆 (別所)	世良 (阿部)	小樾 (寺井)
聖民 (稻毛)	政寛 (市原)	政簡 (市原)	青玉 (鈴木)
青城 (岸田)	石窓、節堂 (十河)	雪堂 (玉楮)	小筠 (多田)
錢嶺 (竹内)	世寧 (泉川)	青野 (谷川) (河田)	雪湖 (戸祭)
星翁 (泉川)	省齋 (葛西)	石溪 (蓮井)	清泉 (中)
井洲 (村岡)	政節 (多田)	清矣 (高島)	清卿 (武井)
金吾 (竹内)	赤嶽、清類 (森)	世和 (中條)	醒軒 (中村)
齋民 (松平)	成海 (細谷)	石潭 (牧)	石騰 (森)
小田園 (山田)	政輔 (山田)	成興 (柳川)	成憲 (木村)
清 (葛西)	遷 (木内森)	千畝 (玉楮)	小畫禪室 (兒島)

正嘉(瀬山)	政章(日柳)	政愨(日柳)	靜所(武井)
世鈞(芝山事)	世璜(尾池)	正漸(尾崎)	樵(青山)
石水(赤松)	紹伯(狩野)	西原(小橋)	雪航(三井)
雪山(青葉)	赤堂(菅)	盛敏(友安)	政忠(瀨川)
潜齋(富山)	星溪(河地)	青節(上里)	正容(小夫)
政典(寛)	聖洲(日下)	靜學(小橋)	

〇ス之部

菅原道眞(菅公)

(來寓人)

是善の第二子幼名阿呼、幼にして穎悟學を好み博く經史に通ず、文章博士となり仁和二年正月十六日年四十三にして讚岐守となり、寛平二年任滿ちて歸京し遣唐使となりしも唐末戰亂の爲め廢止となり、六年を経て昌泰二年右大臣に任せられしか纔に三年にして左大臣藤原時平に讒せられて、延喜元年正月俄に太宰權帥に貶せられ同三年二月配所に薨す、享年五十九、安樂寺に葬る、後正一位太政大臣を贈り、天曆中祠を北野に建て靈を祀りて天滿天神と稱す、著す所菅家文章、菅家詩集、新撰萬葉集、類聚國史等あり。

菅公の讚岐に於ける任期は僅かに五ヶ年なりしも、其間に政治上及び教育上に就きての事蹟は多大なるものありて國民今に到る迄其徳を叙慕し、公を祭らるゝ其祠は國中殆んど百以上もあるならんが其中にて重なるものは高松市の華下天滿宮、中野天滿宮、瀧宮天神社等にて皆何れも由緒あるものなり、而して其讚岐に來られし經路に付

ては左の如くてある。

仁和二年三月末頃に海路浪華より舟出して四月初旬に庵治まで来られしも風波の爲め三日間同地に舟を停め、而して笑原莊東濱港に着され上陸されしも適當の旅舎なかりしを以て長命寺即ち今の片原町の天神社に宿泊され、同年四月七日に瀧宮の宮府に入られたり、翌三年休暇を乞ひ上京し同四年三月廿六日再び讃岐に歸り、是より寛平二年迄前後五ヶ年間國司として政治教育に盡くされたり。

一、城山に雨を祈る、同四年頃より降雨なく國民困難其極に達せしを以て公は同四年五月六日齋戒沐浴して、綾歌郡府中村にある城山神社に雨を祈られしに天忽ち曇り沛然として降雨あり、農民皆な蘇生せり。

一、國學の再興、國學は奈良時代の始め既に衰へたるが公の讃岐に来らるゝや直ちに國學を再興し、官舎の北方松崎に孔子の廟を建て春秋二季に釋奠を行はれたり。

一、菅公の左遷、寛平二年春任期満ちて歸京され、後五年を経て遣唐使に任せられしも當時支那は唐末戰亂の爲め赴任廢止となれり、後六年を経て右大臣に任せられたか左大臣藤原時平の讒言により、延喜元年正月二十五日太宰權帥に貶謫せられ、二月二日海路筑前に向はれ途中其乗船香川郡下笠居村牛鼻浦に碇泊されし事三日、舊臣平賀雅俱、秦久利及龍燈院空澄香西漁人平賀某等之を聞き謁見を請ひしも附添の官

吏許さざりしを以て菅公亦別を惜しみ、自ら肖像を書かき秦久利及平賀某に與へられしと云ふ。

讃岐に於て菅公の教を受け恩寵を蒙りしものは左の如しと云ふ。

香川郡の秦久利 三豊郡觀音寺町の日儀 大川郡寶藏院の明印法師

高松市内長命寺(今の片原町華下天神社)僧圭 綾歌郡瀧宮の空澄

諏訪 五郎光秀

正暦五年南海賊起る、五郎、平惟時に従ひ賊を征し、香川郡河邊に止る、大治中に及び諏訪少目光親諏訪神を奉迎し、之を祀る天永年中諏訪寺を建て、諏訪神社の祭を主らしむと云ふ。

附記 平惟時は惟將(鎮守府將軍)貞盛の次男、從五位上肥後守北條氏の元祖にして、天文四年四月卒す。

諏訪 又右衛門

五郎の末裔にして香西氏の部將なり、天正十年八月五日香西伊勢馬場合戦に参加し奮闘せり。

陶 丹後守義清

阿野郡陶村指月所城の城主なり。

(參照) 指月所城、陶村大宮前にあり、相傳ふ陶丹後守茂清之に居る、是れ上古陶村の領主也。

駿河權守高階保遠

鹽飽本島東山城の城主なり、城の位置は本島の東北端東山の中央にありし、鎌倉時代に鹽飽地頭駿河權頭高階保遠の居城たりしか天正の頃に至りては代官福田又次郎是に居たるか如し。保遠は熱烈なる法然上人の○拜家たりしなり。

末石 五郎兵衛

は香川郡太田村伏石の城主にして香西氏の部將なり、(佐藤掃部が親)天正十五年頃生駒家に召出され、東讃の郡司となる。

住吉 廣夏

(鶴洲を見られよ)

數越 養三

通稱初七内後彌次右衛門、致仕後養三といふ、高松藩士、○詩歌を能す、明治初歿す年八十餘。

末峰 道言

名道言、通稱嘉市郎、香川郡三名人、○歌を能す、寛政元年西行六百年追善集に二十三首入る。

末峯 高恒

名高恒、文化頃東讃人、○歌を能す。

杉原 玄玄

名敦、號玄玄堂、高松醫、○詩文を能す、○寛政十一年此人竹石の畫竹を唐館に持行き、清人に示し、に彼賞觀せし由記して、末に七十老拙玄玄と歎す、○筆山集に玄

玄圃看花詩あり。

杉山正之

名正之、高松人、明治初年頃、○詩を能す、○春曉、睡味愈濃懶思纏。東窓旭日竹陰連。無端芳夢被鶯攪。失却池塘詩半聯。

杉野次義

名次義、通稱喜傳次、高松藩士、○歌を三冬に學ぶ、○西濱眺望、白浪のよりきては又港風吹くに任せて出る百舟。嘉永頃の人。

杉野次定

名次定、通稱六郎、高松藩士、○芝山に學んで書を能す、寛政六年正月廿日歿す、年六十九、小國牛山の墓は其書なり。

杉野栗岳

名は次蕃、諱清保、號栗岳、九郎左衛門と稱す、高松藩士、勤の餘暇南湖に學んで書

を能くす、文久二年十月九日歿す、年六十六。

杉野克己

名克己、通稱長之助、高松藩士、○俳を能す、號滴翠園夏椎、明治四十四年四月歿す年六十七。○小原女の荷折添へて花の枝

諏訪種義

名種義、通稱甚兵衛又吉左衛門、高松藩士、本姓上原、○國學に通じ歌を能す、○木村重成、返さじと益荒武男が引弓の思ひ放ちて出て行く身か、○曉子規、さらでしも曉起は露けきに憐をそへて鳴く子規、是大海三冬二人判二十番歌合にあり、天保十五年十月廿八日歿す。

鈴木善兵衛

松平節公の時代に鈴木善公術といへる郡奉行あり、(致仕して常賢と號す、常賢は英公に従ひ下館より參れる人也) 循吏の聞へあり、ある時大檢見の後兩郡奉行御前へ出て年の豊凶を申上げるに、一人は殊の外豊年なりといふ、善兵衛は豊年にあらずといふ

其故をとへば凡貧民は蕎麥大根を食と致し候、然に當年蕎麥大根皆不熟にて貧民殊に難義仕候得ば豊年とは申がたしと、○常賢は土の理にくはしき人にて當國上田、中田、下田、下々田の分れ並に免定めは多く常賢のせられしとなり、且つ節公の時多く新田を開きし人也。(藍窓茶店)

鈴木義績

高松の人、和歌を能くす、嘉永年頃の人、讃岐名勝圖會に歌數首のせたり。

柳泉○青柳のかけをながるゝ石清水むすぶ袂のいともすゞしき

鈴木蕃利

通稱直八、高松藩參政となる、致仕して直彌と稱す、鈴木勇の父なり、和歌を能くす、明治十六年五月九日歿す、年七十四。

鈴木資深

名資深、通稱一馬、高松藩士、嘉永頃の人、歌を好くす、名勝圖會に歌數首出せり。播磨がたおきつ汐風よきぬらし引田の浦に波たちさわぐ

鈴木益枝

名益枝、高松藩士、○中村尙輔に學び歌を能す、明治廿五年頃に歿す。窓月 吳竹の葉末の露に影とめてかせにふき入る窓の月かな

鈴木熊泉

通稱茂左衛門、號熊泉、村尾石溪の弟、天保弘化頃の人、○畫を能す。

鈴木鹿泉

名元鳳、號鹿泉、高松人、○詩を能す、采風集に姓鈴木とあるは此人ならん。○湖泊、湖山霜冷斷猿愁。落木雲迷古渡頭。一夜篷窓羈客淚。併成秋雨枕邊流。

鈴木三橋

名詔、字九成、通稱理兵衛、號梅巖又三橋、高松人、○詩書畫を能す又鑑識あり、竹石と交はる、文政八年八月歿す、年五十八、○畫譜に出づ、○記す所上洛日記あり。

鈴木青玉

名美奈、號青玉、高松人、伏石屋常三郎妻、○春木南湖に學び花鳥を畫く、最も梅花に妙なり、安政四年正月歿す、年七十八。

鈴木義方

名義方、通稱辰之助、東洋の父、○歌を能す。

鈴木東洋

名義和、字子幹、通稱傳五郎、號東洋又白雲洞、義方の子、○畫を愛山に學び墨竹を能す、初期二期三期四期の貴族院議員たり、明治四十三年十一月歿す、年五十四。

鈴木梅堤

高松市南新町の人、通稱種造、故鈴木東洋翁の義弟として二丁目鈴木を襲ぐ、壯年時より風流を好み茶道にいそしみ、又梅堤と號して畫を能くせり、大正十五年十二月十三日歿す、年七十二。

燧山

俗姓大岡、名篤雄、號燧山又獅岳、又六處隱士又無二庵晚年燧翁又如翁と號す、寒川郡末村燧山僧、○書畫歌狂歌を能す、明治十七年九月寂す、年七十二。

穗屋

高松湊町、俗稱西原屋利八、嘉永頃の俳人、川筋へ日のすちかふて草もみち

瑞鼎

號瑞鼎文化頃東讃人、○詩を能す。

醉應

太山堂と號す、丸龜の俳人。

隨鳳

仁尾の俳人、五徳庵と號す、通稱畠山爲右衛門。

ス 號 索引

- | | | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 崇美
(後藤) | 翠竹
(北村) | 崧溪
(菊池) | 水澄
(蘆澤) | 翠亭
(木内) | 水竹
(山内) | 水田
(梶原) |
| | | | 崇悅
(増田) | | 醉香
(原) | |
| | | | 壽滿
(玉芝) | | 瑞鼎
(燧山) | |
| | 翠雲
(莊司) | | 翠美
(狩野) | | 崇
(松原) | |

昭和三年八月十一日印刷
昭和三年八月十三日發行

【定價 金五圓】



著作兼 發行者 梶原猪之松

印刷人 香西榮太郎

印刷所 香川縣高松市內町四十七番地 高松製版印刷所

發行所 香川縣高松市縣廳前 株式會社 高松製版印刷所

電話九四番

七廿了下 - 1

1705

終

